

桜と向き合う歌

今年、福岡市では全国で最も早い桜の開花を観測しました。例年よりも5日も早い開花なのだそうです。

玄侑宗久が言っていることですが、梅、桃、桜はそれぞれ独特のイメージを喚起させます。梅は寒いほど香りが強くなり、剪定が欠かせないこともあって、鍛えるほどに美しくなる「儒教」の感覚です。桃には無邪気で自由闊達な雰囲気があり、どこか「禅」の世界を連想させます。桜には一気に咲いて一気に散る「無常」であるがゆえの祝祭のイメージがあり「浄土教」に通じるものがあります。

しかし、勢いよく咲き始める桜花は、無常を感じさせる桜の風情とは違って、真っ直ぐな生命の輝きを帯びています。ちょうど梅の強さと、桃の無邪気さをもあわせ持つ、生命の横溢です。

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけてわが眺めたり
(岡本かの子『浴身』)

今年咲く、ただ一度きりの花、そして、それを見る私の人生もただ一度しかない。生命を燃やし尽くした、岡本かの子らしい歌です。

関東大震災に被災して島根での避難生活を終えたのち、新田亀三と新しい恋に落ちたころの歌なので、愛人堀切茂雄の病死、長女、次男の相次ぐ早世から、ようやく立ち直りかけた時期の心情をも表していると思います。その意味では、生命の再生の歌でもあると言えるでしょう。

命の横溢に圧倒されながら、ただ圧倒されるだけではなく、堂々と対峙して生命を奮い立たせる、かの子の息吹が聞こえるようです。

■ 再生の歌

桜の花を詠んだ歌で忘れられない、もう一首があります。歌そのものの響きの美しさもさることながら、今では歌人として一家を成す馬場あき子が、人生の再出発のなかで詠んだことを知ることで、しみじみとした感慨をおぼえます。

夜半さめて見れば夜半さえしらじらと桜散りおりとどまらざらん
(馬場あき子『雪鬼華麗』)

三十年近く勤めた教師の職を辞して、京都に旅したときの歌です。そのときの様子を馬場あき子は次のように語っています。

宿泊した宿の中庭の桜を、夜半に起き出して眺めていた。灯火のほのかな明りの中に浮かび出た桜は、人々の寝しずまった静かな闇に佇んで、誰の目にも見られないまま、自ずからなる摂理に従って、白い花びらをはらはら、はらはらと惜しみなくこぼしつけていた。四十九歳で職を捨てた私の感じている、惜しまずにはいられない時間の、刻々の消滅のようにも、私という存在を残して過ぎてゆく非情な時間のようにも感じられた。（歌林の会「さくやこの花」）

職を辞した直後の不安の中にあって、詠み手は「自ずからなる摂理に従って」花を散らす生命と対峙します。それは「私という存在を残して過ぎてゆく非常な時間」のようにも感じられるのですが、同時にその幽玄な姿に出会うことで、ただひとり歩み始めるものの決意が秘められているようにも思います。岡本かの子が歌ったように「生命をかけて」向き合おうと、奮い立たされたのではないのでしょうか。

この歌もまた、人生の大きな転機で満開の桜と出会い、再生の灯火をあげる一首だと思います。

■ 立ち尽くす歌

最後に、やはり桜と対峙する歌でありながら、前二首とは全く異なるものをご紹介します。生命の横溢から力を得て再生するのではなく、そこから身動きもとれず、立ち尽くす歌です。

すさまじくひと木の桜ふぶくゆゑ身はひえびえとなりて立ちをり
（岡野弘彦『天の鶴群』）

岡野は東京大空襲で、満開の桜が咲いたまま、炎に包まれる様子を目の当たりにしています。軍人として東京で累々たる死屍を処理するという作業を終えたあと、彼は茨城県の小さな町に配属になります。その町の中学校で桜のふぶくを見たとき、「ひえびえと」立ち尽くすことしかできませんでした。このとき、もう桜を美しいとは思わず感じたのだそうです。

ウクライナの惨状を毎日のようにテレビで目にする、こんなことが起きてはいけないと思うと同時に、このような戦争が引き起こされる日常にいま暮らしていることを、改めて思います。かの地でも、桜の花が咲いたまま焼かれているかもしれません。

岡野弘彦の「ひえびえ」とした思いは、決して遠い昔の歴史の一断片ではないと、つくづく感じます。そして、一日も早く桜の花やライラックの花が咲き誇り、再生の歌が歌われる日の来ることを祈ります。（所長 瀬戸 英晴）